



石油より安く、熱効率世界一 木材ペレットストーブを開発

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 平野 喬

東日本大震災の残した教訓は防災面だけにとどまらず、日本人の暮らしぶりそのものにも見直しを迫っているようです。原子力発電所の事故、稼働停止などで今年の夏も大規模な節電が余儀なくされ、家庭での冷房も思う存分使うのはためられるようです。

しかし、災いを転じて、新しい暮らし方に活路を見出す動きも沢山あります。今回は「エネルギーの地産地消」という観点から、木くずや間伐材から作る木材ペレット、それを燃やすストーブの普及を紹介します。震災後の避難所には、いつまでたっても石油やガソリンが届かず、ストーブもつけられず、自動車が動けないという日々が続きました。石油やガソリンは危険物として、許可を得た業者しか運べないため、寒さのために亡くなる人まで出てしまったのです。

ところが、地元の間伐材などを原料にしたペレットは、誰でも運べることから、新潟のペレットストーブメーカーが、43基のストーブとペレットを避難所に運び込み、「温ったかい」と被災者たちから大喜びされました。余りにも石油に依存した人びとの暮らしは、そのライフラインが壊れた途端に身動きできなかつた

坂本龍一さんと森林づくりパートナーシップ協定を結んだ際のポスターの前で。木質エネルギーの里づくりが古川さんの夢だ



のです。

ペレットストーブを届けた熱血漢を豪雪の新潟に訪ねてきました。(株)サイカイ産業で開発隊長と名乗る古川正司さん(47)。古川さんの前職はとび職です。新潟県内のリゾートホテルや原発の建設などにも携わったそうです。しかし、仕事が終わると、「はい、ご苦労さん!」と東京が本店の大建設会社に首を切られ、地方には利益が落ちない仕組みに疑問を感じたそうです。そして、仕事で入った山々が荒れ放題なのを目の当たりにしました。

元とび職古川さんの挑戦

古川さんは、40歳の時にとび職を辞め、木質ペレットを作る会社を興し、それを燃やすストーブの開発にも取り組んできました。日本のエネルギー自給率は4%程度。残りの96%は外国から買っているため、「化石燃料は使うほどお金が海外



世界一の熱効率だというペレットストーブと古川さん

に流れ、地域を貧しくする」という古川さんは「森林の多い日本こそペレットを使うのに最適の国」とがむしゃらに働いてきたそうです。

古川さんは熱効率が85%という「世界一熱効率の高いストーブ」の開発に成功します。固形燃料の特徴である「おき火」(ストーブの下にたまった燃えカスの火)を十分に利用することで熱効率を大幅に改善したのです。

その結果、石油ストーブより、ペレットストーブの燃料費が安くなったのです。環境のためだけでなく、経済的にもプラスになることは、市場でモノが売れる必須条件です。古川さんは、移動式の木質ペレットの製造プラントも開発し、各地に貸し出しています。間伐材の出る山とペレットを作るプラントが近ければ近いほど、運搬費のコストダウンにつながり、安価なペレットが供給できるからです。実は、世界の森の再生運動に取り組んでいるミュージシャンの坂本龍一さんが古川さんらの活動に共鳴し、新潟市も加わってパートナーシップ協定が結ばれました。被災者の仮設住宅には100台の木質ペレットのストーブが寄付されました。

財団法人 地球・人間環境フォーラム
環境省所管の公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。